

ユリ香り抑制剤処理による香気成分量の抑制効果



写真1 供試品種は左から‘カサブランカ’、‘シベリア’、‘ソルボンヌ’、‘イエローウィン’



写真2 ユリ切り花に吸液させている様子

オリエンタル系ユリやOT系ユリ（オリエンタル系とトランペット系の交配種）は花卉から甘く濃厚な強い香りを放つことから、香りを好まない一部の消費者や病院、飲食店などでの使用が敬遠される場合があります。そのため、香りの少ないユリ切り花による消費の拡大が期待できます。

そこで、ユリの香りを少なくする薬剤「アミノオキシ酢酸」の0.1mM水溶液を‘カサブランカ’‘シベリア’‘ソルボンヌ’および‘イエローウィン’の切り花に、収穫後3時間と花屋へ到着後48時間吸液させた場合に、香気成分量がどの程度まで減少するかを11～1月にかけて調べました。なお、香り成分は開花後に成分を吸着する器具を花卉に装着し、30分間採取した後、ガスクロマトグラフィで分

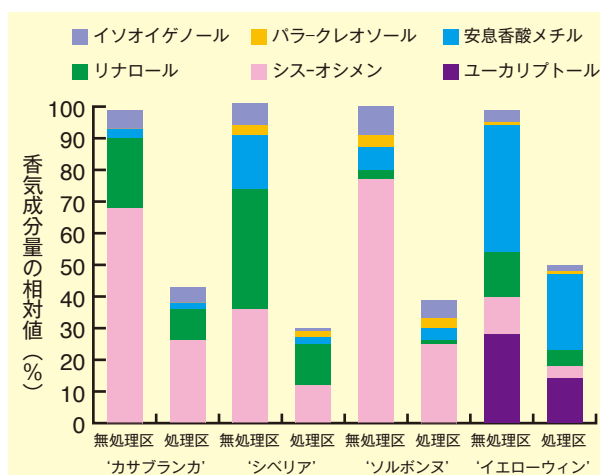


図 アミノオキシ酢酸水溶液の吸液処理がユリ切り花の香気成分量に及ぼす影響

注) 収穫後の前処理と花屋到着後の後処理を想定し、採花したユリを15℃恒温、湿度50～60%、人口照明下で3時間吸液させ、箱詰めして10℃暗黒条件下で3日間放置した後、23℃恒温、湿度50～60%、12時間日長（人口照明）条件で48時間吸液させた。

析しました。

その結果、‘カサブランカ’は無処理区と比べて43%、‘シベリア’は30%、‘ソルボンヌ’は39%、‘イエローウィン’は50%まで香気成分量を抑えることができました（図）。

今後は、その他の品種における香り抑制効果について検討し、ユリの香りを抑制する技術の実用化を目指します。

なお、本研究は農水省委託研究「ユリ需要拡大のためのユリ香り抑制剤の実用化」の中で実施しています。

（花き担当 門田太志 088-863-4918）